



「活魚運搬車」

西南自動車工業株式会社



愛媛
CATV
動画



海や漁村の地域資源を活用して水産物の消費拡大と所得向上を図る事業として推進している海業。
そのなかのひとつ、養殖業が盛んな愛南町において欠かすことのできないのが活魚運搬車。毎日のように目にする活魚運搬車ですが、この活魚運搬車を製造している会社は日本で2社しかなく、そのうちの1社が蓮乗寺に事務所を置く西南自動車工業株式会社です。

創業57年目を迎えた西南自動車工業(株)が手掛ける活魚車は最少3トン級から最大25トン級まで幅広いラインナップを揃えており、北は北海道のカニ・ホタテ輸送、南は鹿児島島のカンパチ・ブリ輸送まで、西南自動車工業(株)で作られた活魚運搬車が抜群の鮮度で食卓へ届けるという使命のもと全国各地で活躍しています。
現在19人が働く西南自動車工業(株)では年間15台前後を手掛けており、積み荷や使用環境に合わせて完全オーダーメイドで製造するため、1台当たりの製作期間は3〜5カ月を要します。工場内では水槽部分の製作、加工やトラック車体の改造、装置の取り付けなど各工程に分かれて着々と作業が進められます。



▲作業が完了し納車の時を待つ25トン級の活魚運搬車



軽くて強く耐腐食性に優れるFRP(繊維強化プラスチック)で作られた水槽の耐用年数は約25年であるのに対し、トラックの車体は約5年。活魚運搬車は海水を扱うため塩害による腐食を受けやすく、車体が古くなると載せていた水槽部分を取り外して新しい車体に載せ替える業務も行っており、新車の製造と水槽載せ替え業務はおおよそ半々の割合です。
また、活魚運搬車の製造で培った『活かしの技術』を駆使した定置水槽も高評の西南自動車工業(株)。定置水槽の納品先は卸売市場や水族館など多岐に渡ります。



西南自動車工業(株)で製造される活魚車用の水槽は、造船などと同じ型抜き方式を用いているため抜群の耐久性を持ちます。圧倒的な『活かしの技術』が強みである同社の水槽には、効率よく水流が循環する設計になっており、水温調節の仕組みなど独自の技術とアイデアが詰め込まれた水槽はユーザーから高い評価を受けています。使い勝手が良く作業性に優れ、海洋資源を圧倒的鮮度で食卓まで届けることを第一に必要な装置や設備についてユーザーと綿密な打ち合わせを行いながら作り上げた一台は、まさに同社が目標として掲げる「ユーザーの視点に立った一歩先のものづくり」を体現しているかのようです。



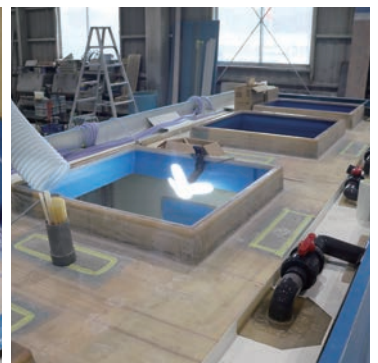
代表取締役の宇都宮直人なおとさんは「私たちの作る活魚水槽は、海洋資源を無駄なく新鮮な状態で消費地に運ぶと言う重要な役割を担っている」と話します。

活魚運搬車の製造を手掛ける会社は、先述のとおり西南自動車工業(株)と佐賀県にある会社の2社のみ。「背景には、地域に根付き発展を遂げた魚類養殖があつて、そこでとれた資源を生かしたまま首都圏に運びたいという思いやニーズがあつたからだと考えられる」と話す宇都宮さん。続けて、「たくさんの魚を活かしたまま消費地に運ぶためにはどうしたらいいのか、先人たちが研究をはじめたその思いを我々が引き継ぎ、現在の活魚運搬車があるのだと思う」と作り手として熱い思いを述べました。



▲全国に2社しかない活魚運搬車の製造について説明する宇都宮直人代表取締役

◀活魚運送業に就いて以来、西南自動車工業(株)で作られた活魚運搬車のハンドルを握る(有)轟運輸専務取締役の轟雄太さん。同社の活魚運搬車について、「目的地に到着して水槽の中を確認するたびに、同社の高い技術力を感じる」と太鼓判を押します。



宇都宮さんは、『物流の2024年問題』についても作り手の視点で思いを持ちます。2024年問題によってトラックドライバーは時間外規制により総稼働時間が制限を受け、輸送力の低下・需給バランスの崩れが懸念され、荷主と運送業者の負担増加が避けられない状況があります。その状況を受け、「解決策の一つとして弊社の『活かしの技術』を全国的にアピールしたいです。また、活魚運搬において必要不可欠なテーマである持続可能な物流、SDGsについても作り手の立場で積極的に可能性を追究していきたい」と展望を述べました。

時代とともに取り巻く環境が目まぐるしく変われど、圧倒的な鮮度で海産物を食卓に届けるという物流の使命は変わりません。西南自動車工業(株)で働く一人一人の思いと技術が結集し、海で育った逸品を運ぶための逸品が作られていました。